View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

論　文

ルツ記の研究 ── 1 章 18 ～ 22 節 ──

柊　　曉　生

はじめに

前稿において我々はルツ記 1 章 8-17 節の考察を試みた[1]。ルツ記 1 章の三部構成の真中の部分 (B) である 8-17 節は, ナオミの会話が 3 回あってそれが全体の枠組を構築しており，その真中の第 2 回目の会話は三部分に分割され，さらにその真中にあたる第 2 区分は三区分され，この三区分の真中の第 2 区分（12 節後半）が中心であると見た。

本稿ではこれにつづくルツ記 1 章の三部構成の最後の部分（A'）である 18-22 節の考察を試みる[2]。この箇所は (a) 18-19 節, (b) 20-21 節, (a') 22 節の三区分から成り立ち[3]，真中（b）のナオミの会話を中心として前後に叙述文を置いた構造となっている。

1 章は士師たちがおさめていた時代に飢饉がおこり，エリメレクとその一家がベト・レヘムからモアブの平野に出かけて行くという書き出しで始まる。物語が大きく転回するのは，モアブの平野でエリメレクが亡くなり，二人の息子もモアブの女性を娶りながらも死んでしまうという

---

[1] 「ルツ記の研究 ── 1 章 8 ～ 17 節 ──」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要第 12 号』（2011）25-55 頁。

[2] R. L. Hubbard は 19-21 節を，H. W. Herzberg，K. Nielsen，ALacocque は 19-22 節 を，J. M. Sasson，E. Zenger，C. Frevel，F. Bush，I. Fischer は 19b-22 節を一つの単元と見る。拙稿「ルツ記の研究 ── 1 章 1 ～ 7 節 ──」『アカデミア』文学・語学編第 89 号（南山大学，2011 年）57 頁参照。筆者が 18-22 節を一つの単元とするのは本稿で詳述するように文学構造上の観点からである。

[3] これは「おわりに」で見るように，（A）1-7 節との対応関係からは，（A'）18-22 節の（c'）18-19 節, (b'）20-21 節, (a'）22 節と理解される。

ことにある。ちょうどその時,主が食物(レヘム)を与えられたと聞いて,ナオミと嫁の一人ルツがモアブの平野から再びベト・レヘムに帰って来る。それはちょうど大麦の刈り入れの初めの頃であったというのである。

地理的にはベト・レヘムから出発してモアブの平野に寄留し,再びベト・レヘムへ帰還するという回帰であり,時間的には士師たちがおさめていた時代という長い時間の区切りで始まり,大麦の収穫の初めというより短い時間の区切りに絞られて終わっている。飢饉で始まる1章は収穫で終わり,この主題は2章へとつながってゆくのである。

1章 18-22節の全体的構造

集中化構造

a　18-19　ナオミとルツの帰還
b　20-21　ナオミの会話
a'　22　　ナオミとルツの帰還

18-22節はナオミの会話(20-21節)を真中にして,前後の叙述文が枠構造を形成している。後述するようにナオミの会話は集中化構造となっており,その真中の「行く」と「帰る」が枠組である前後の文節の「行く」と「帰る」と連繋している。枠組にはそれぞれ,「着く」,「ベト・レヘム」,「ナオミ」がインクルジオとして出てくる。

a　行く(הלך, 2回)
　着く(בוא, 2回)　ベト・レヘム(2回)　ナオミ
　私を(לי, 3回)　ナオミ
b　行く(הלך, 1回)
　帰る(שוב, 1回)
a'　帰る(שוב, 2回)
　私を(בי/לי, 3回)　ナオミ
　着く(בוא, 1回)　ベト・レヘム(1回)　ナオミ
　モアブの平野(1回)　ルツ

キアスムス

町の女たちとナオミとの対話(19bγと20-21節)を一対のものとして把握すれば,これがナオミとルツの帰還の記事(19aと22節)には

さまれたキアスムスの構成となっているとも考えられる[4]。しかしながら，18-22 節では対話というよりもナオミの会話のほうに重点が置かれているのでこの解釈は参考としておくにとどめる。

(a) 19a　ナオミとルツの帰還　　(b) 19bγ　女たちの会話
(b') 20-21　ナオミの会話　　(a') 22　ナオミとルツの帰還

1. ナオミとルツの帰還

(1) 1：18-19 の本文

18a　(6 語)　ותרא כי־מתאמצת היא ללכת אתה
18b　(3 語)　ותחדל　לדבר אליה
19a　(6 語)　ותלכנה שתיהם עד־באנה בית לחם
19bα　(4 語)　ויהי　כבאנה בית לחם
19bβ　(4 語)　ותהם כל־העיר עליהן
19bγ　(3 語)　ותאמרנה הזאת נעמי

(2) 1：18-19 の翻訳

18a　ナオミはルツが自分と一緒に行くと強く心に決めているのを見で[5]，
18b　彼女に言うのはやめ，
19a　ベト・レヘムに着くまで二人一緒に[6]歩いて行った。
19bα　彼女たちがベト・レヘムに着いたとき，
19bβ　町中が彼女たちのことで大騒ぎになり，
19bγ　「これはナオミではないの」と女たち[7]は言った。

---

[4] F. Bush は女たちとナオミの対話を中心に 19b-c（introduction）と 22 節（conclusion）を枠組として理解する。*Ruth/Esther*（Nashvill 1996），89-90，94 頁参照。しかしながら後述するようにナオミの会話の構造分析の一部は適切ではない。

[5] 「ナオミ」も「ルツ」も原文では「彼女」。

[6] 本来は「彼女ら二人」と女性形であるべきなのが，原文では「彼ら二人」と男性形になっている。4：11 も同様である。代名詞が女性形ではなく男性形で用いられている例は，1：8，9，22 などにある。

[7] 原文では「彼女たち」。

(3) 1：18-19 の構造

a [18a　：見る（3sg.f.）＋ kî ＋決める＋彼女＋～に（lᵉ）・行く＋共に・彼女
　　18b　：断つ（3sg.f.）　　＋～に（lᵉ）・語る＋～に・彼女

b [19a　：行く（3pl.f.）＋彼ら二人＋～まで（ʿad）　＋着く＋ベト・レヘム
　　19b α：在る（3sg.m.）　　＋ kᵉ・着く＋ベト・レヘム

a' [19b β：騒ぐ（3pl.f.）＋全ての＋町＋～に（ʿl）・彼女ら
　　19b γ：言う（3pl.f.）＋これは＋ナオミ

集中化構造

a　ナオミの見解と沈黙　　彼女（היא）：人称代名詞＝ルツ
b　ベト・レヘムへの帰郷
a'　女たちの歓迎と会話　　これ（זאת）：指示代名詞＝ナオミ

①枠組　a–a'

a（18 節）ではナオミとルツの二人の女性たち，a'（19 節後半）では町中の女たちとナオミという女性たちで枠組みが構成されている。但し，a ではナオミが主語であり，a' では町の女たちが主語となっている[8]。

㈠　a においてナオミがルツに「語るのをやめる」のに対し，a' においては町の女たちが騒ぎ立ってナオミに「言う」と述べられている。冷静に語るのをやめるナオミと興奮して言う町の女たちが対照的である。

a　（18b）　ナオミ　　（3sg.f.）→ルツ　：語るのをやめる（חדל לדבר）
a'　（19bγ）町の女たち（3pl.f.）　→ナオミ：言う（אמר）

㈡　a では「彼女」（היא）という 3 人称女性人称代名詞がルツに適用されているのに対し，a' では「これ」（זאת）という 3 人称女性指示代名詞がナオミに適用されている。二人の異なる女性に対して，異なる代名詞

---

[8]　a（18 節）で 3 人称女性単数の動詞「見る」,「やめる」の主語はナオミであり, 対象はルツである。他方, a'（19 節後半）で 3 人称女性複数の動詞「騒ぎ立つ」,「言う」の主語は「町中」であるが，動詞が 3 人称女性複数であることから，これは町中の「女たち」であることが言外に意味されていると理解される。P. Joüon, *Ruth*（Rome 1953）43. 同, GHB, §155bN. 参照。4：14 では「女たちはナオミに言った」と主語が明白に「女たち」と書き記されている。

の用法という対応関係がある。

㈢　a においてはナオミと一緒に行くというルツの心持が「強固である」と言われているのに対し，a' においては町の女たちがナオミとルツに「騒ぎ立ち」と述べられており，両者の感情が明白に表現されている。

a　18a　　ルツの気持は「強固である」（אמץ）[9]

a'　19bβ　女たちの心は「騒ぎ立つ」（הום）[10]

㈣　ただ，a の 2 分節それぞれの後半が並行的であるのに対し，a' の 2 分節は並行的ではなく，その点で文体のバランスは取れてはいない。a とともに 2 分節それぞれの後半が並行的であるのは b（19a–19bα）である。

（a）ナオミ

18a はナオミと一緒に行くというルツの強い決断をナオミが見て取ることを 6 語で記し，18b はそれゆえにナオミが彼女に語りかけるのをやめるということを短く 3 語で述べている。18 節の 2 分節（a，b）それぞれの後半は並行的に記述されている。

18a …＋～に（lᵉ）・行く（inf.）＋～共に（'et）・彼女（ナオミ）לְלֶכֶת אִתָּהּ
18b　＋～に（lᵉ）・語る（inf.）＋～に（'el）・彼女（ルツ）לְדַבֵּר אֵלֶיהָ

㈠ 18 節の 2 分節それぞれの前半はナオミが主語の動詞ではじまっており，並行的であるのはそれぞれの後半においてだけである。どちらも，前置詞「～に」（lᵉ）・不定詞＋前置詞・3 人称女性単数代名詞という同じ順序で，はじめの前置詞「～に」（lᵉ）とおわりの 3 人称女性単数代名詞「彼女」（ha）は 2 分節とも同じ単語である。ただ同じ「彼女」であ

---

[9]　ヒトパエル形分詞。過去における持続的な気持ちをあらわす。P. Joüon, *Ruth*, 43, *GHB*, §121f. F. Bush, 前掲書, 83 頁参照。J. Schreiner は人物の特性をあらわす動詞と見る。"אָמַץ" *TDOT*, I:323–327. 他にヒトパエル形は王上 12：18 ＝代下 10：18，13：7 に出てくる。

[10]　ותהם に関しては，הים/הום のニッファル形と解釈して「騒ぎ立つ」と訳す。*BDB*, 223. *HALAT*, I:232. H. F. van Rooy, *NIDOTE*, I:1018. *DCH*, II:504. 参照。ニッファル形は全部で 3 回あり，「（大声で叫んだので）地がどよめいた」（サム上 4：5）や「町は騒いでいる」（王上 1：45）などと照らし合わせればルツ 1：19b の ותהם を「騒ぎ立つ」と訳すことが可能であると思われる。サム上 18：6–7 には，ダビデが帰ってきた時，町中の女たちが出てきて，歌い踊って熱狂的に出迎えたとの記事がある。

りながら，18a はナオミを意味し，18b はルツを意味しているという違いがある。
㈡ 18a も 18b も同じ前置詞「～に」(lᵉ) に付けられている動詞は両者ともに不定詞であり，18a の不定詞は「行く」，18b の不定詞は「語る」である。
㈢ 18a と 18b の最後尾にある人称代名詞「彼女」に付けられているのは両者ともに前置詞である。ただ 18a は「ともに」('et) というナオミとルツの共存をあらわす前置詞であるのに対し，18b は「～に」('el) というナオミからルツへの方向をあらわす前置詞であるという違いがある。

(a') 女たち

a'(19bβ-19bγ)は町の女たちが主語である2分節から成り立っている。ただ前分節の 19bβでは彼女たちが騒ぎたてる相手がナオミとルツの「彼女らに」(עליהן) であったのに対し，後分節の 19bγ では「これは (הזאת) ナオミではないの」と述べられ[11]，ナオミ一人だけが問題となっており，ルツは等閑に付されている。

町中の女たちがナオミとルツの二人に大騒ぎしながらも，彼女らはルツをはじめて見るのであり，馴染みなのはナオミであるから，最後にはナオミ一人へと焦点が絞られていると考えられる。

また真中の b (19a-19bα) ではベト・レヘムが 2 回繰り返されているのに対し，a' (19bβ) ではそれが町という単語に置き換えられている。ベト・レヘムから出発し，モアブの平野に寄留し，再度ベト・レヘムに戻るのであるが，そこは町であるというのである。いわば家 (ベト・レヘム) から出かけ，野 (モアブの平野) を経て家 (ベト・レヘム) へと帰るが，そこは町だというのである。

町中の女たちがナオミとルツの「彼女らに (関して)」(עליהן) 騒ぎ立っ

---

[11] ここでの副詞「～ではないか」(ה/ha) は疑問というよりも，反語的な用法で，歓喜の驚嘆をあらわす。"*C'est donc Noémi !*" P. Joüon, *GHB*, §161b. "an exclamation of joyous surprise" R. L. Hubbard, 前掲書, 123. "a rhetorical question" F. Bush, 前掲書, 91.

て，「これはナオミではないの」と言う（אמר，3pl.f.）のに対し，ナオミはその言葉を引き受けて20節で「彼女らに（対して）」（אליהן）言う（אמר，3sg.f.）[12]。ナオミはルツに対しては語る（דבר）のをやめるのであるが，町の女たちに対しては言い返す（אמר）のである。「彼女ら」（עליהן）に対する動詞は「言う」ではなく「騒ぎ立つ」ではあるが，語順を合わせみれば，(a)彼女らに(עליהן)-(b)言う(אמר)×(b')言う(אמר)-(a')彼女らに(אליהן）とキアスムスの様式で形成されているということがわかる。

②真中　b

真中のbもまたaと同様に，2分節それぞれの後半が並行的に書かれていて，ベト・レヘムへ帰り着くまで行くことと，ベト・レヘムその地へ着いたという時間と空間が問題となっている。

19a　～まで（ʿad）＋着く＋ベト・レヘム　ער־באנה בית לחם

19bα　＋ kᵉ・着く＋ベト・レヘム　כבאנה בית לחם

18-19節の集中化構造の真中に位置するbの2分節（19a，19bα）それぞれの後半においてベト・レヘムが並行的に2回繰り返されるのは，ベト・レヘムこそがまさに帰るべき家（ベト）であり，そこにこそ食物（レヘム）があるからと強調するために他ならない。

この集中化構造の真中にあるbを枠組であるaと結ぶつけるものはインクルジオとなっている動詞「行く」（הלך）である。

18a　彼女と共に行くこと（不定詞）　ללכת אתה

19a　彼ら二人は行った（動詞は3人称女性複数形）　ותלכנה שתיהם

ルツがナオミと共に行くことを決意しているのを見て，ナオミは説得するのをやめ（18節），結局二人はベト・レヘムに行くことになる（19節前半）。

19aと19bαそれぞれの後半は並行的に記述されているが，意味的には少しく異なるものである。前分節（19a）では彼女たち二人がベト・

---

[12] 注3で述べたようにF. Bushは19b-21節の文学構造を町の女たちとナオミの対話ととらえる。しかしながら18-22節の中心はやはりナオミの会話であり，町の女たちの会話はそれを引き出す役割を果たすものでしかないと考えられる。

レヘムに着くまで歩いていった継続の行為が問題であるのに対し，後分節（19bα）では彼女たちがベト・レヘムに着いたという到着の時点が問題となっている[13]。

同じ地名のベト・レヘムが並行的に使われており，空間的には同一の場所が問題となりつつも，前分節はベト・レヘムへ着く「まで」（עד）の継続的な時間をあらわし，後分節はベト・レヘムへ着いたという瞬時的な時間（～ויהי כ）を言っている[14]。それゆえマソラ本文は19節をアトナー（^）の分割記号で二つのベト・レヘムを分けるわけである[15]。これはa（18節）の2分節で「彼女」（ה）という3人称単数女性代名詞が使われながらも，一方はナオミを意味し，他方はルツを意味するという違いがあるのに等しいであろう。

多くの註解者は19bから新しい段落がはじまるとして19aから分離する[16]。たしかに本稿も上述したように時間的，空間的な分離は認めるものではあるが，ベトレ・ヘムが並行的に記述されているということは[17]，分離とともに連繋もあるのであり，そうした観点から18-19節を見れば，キアスムス的集中化構造であるということもできる。

(a) ナオミ→ルツを見る
　(b) ナオミは語るのをやめる
　　(c) ベトレヘムへの帰途
　　(c') ベトレヘムへの到着
　(b') 町の女たちは騒ぎ立つ
(a') 女たち→ナオミと言う

---

13 R. L. Hubbardは同じ動詞“בוא”（着く）を前分節では“reached”と訳し，後分節では“entered”と訳す。これは町の門の中に入るという理解である。前者は“wide shot”，後者は“close-up”であるとする。前掲書，121-122頁参照。

14 “as soon as”, “at the very time” R. L. Hubbard, 前掲書, 121. 注3.

15 これは1：12baのkî と同様である。拙稿「ルツ記の研究 ── 1章8～17節 ──」40頁参照。

16 注2参照。

17 LXXには19bの「ベトレヘムに着いたとき」が欠落する。

2. ナオミの会話

(1) 1：20-21 の本文

20aα (2 語) ותאמר אליהן
20aβ (4 語) אל־תקראנה לי נעמי
20bα (3 語) קראן לי מרא
20bβ (5 語) כי־המר שדי לי מאד
21aα (3 語) אני מלאה הלכתי
21aβ (3 語) וריקם השיבני יהיה
21bα (4 語) למה תקראנה לי נעמי
21bβ (3 語) ויהוה ענה בי
21bγ (3 語) ושדי הרע לי

(2) 1：20-21 の翻訳

20aα ナオミ[18]は彼女たちに言った。
20aβ 「私をナオミとは呼ばないでください。
20bα 私をマラと呼んでください。
20bβ 全能者(シャッダイ)が私をひどく苦しめられたのですから。
21aα 私は満ち足りた境遇で出かけたのに,
21aβ 何も無しで私を帰らせられたのですよ,主は。
21bα なぜ私をナオミと呼ぶのですか。
21bβ 主は私を痛めつけ,
21bγ 全能者(シャッダイ)は私に悪い仕打ちをされたのです。」

(3) 1：20-21 の構造

		20aα	会話の導入句			
a	(a-1)	20aβ	'al[否定詞]	呼ぶ		私を(לי)＋ナオミ
	(a-2)	20bα		呼ぶ		私を(לי)＋マラ
	(a-3)	20bβ	kî[小辞]	苦しめる	全能者(シャッダイ)	私を(לי)＋大変に

[18] 「ナオミ」は原文では「彼女」

b	(b-1)	21aα	(α)私は[主語]	(β)無尽蔵[形容詞]	(γ)行く[動詞]
	(b-2)	21aβ	(β')無一物[副詞]	(γ')帰す[動詞]	(α')主は[主語]
a'	(a'-1)	21bα	なぜ[疑問詞]	呼ぶ	私を(לי)＋ナオミ
	(a'-2)	21bβ	主	痛めつける	私を(בי)
	(a'-3)	21bγ	全能者(シャッダイ)	悪い仕打ちをする	私に(לי)

集中化構造

20-21 節の全体は a-b-a' の集中化構造によって形成されており，それぞれ 3 分節＋ 2 分節＋ 3 分節から成り立っている[19]。

集中化構造の真中（21 節前半）は,「私」で始まる分節と,「主」で終わる分節の 2 分節から成り，私と主が対立する並行法で記述されている[20]。

1 人称代名詞の「私」(אני) は，枠組として a と a' にそれぞれ 3 回ずつある前置詞・1 人称接尾代名詞「私に」(בי/לי) の真中にあって強調されている。

他方,「主」は，それを b（20-21 節）の全体において見れば，全能者-主×主-全能者とキアスムスの形式で形成されていることがわかる。

①枠組　a-a'

a　呼ぶ（2 回), 同義的動詞（1 回), 私を（לי, 3 回), ナオミとマラ＋全能者（2 ＋ 1 回）
a' 呼ぶ（1 回), 同義的動詞（2 回), 私を（לי/בי, 3 回), ナオミ＋全能者と主（1 ＋ 2 回）

（ｉ）前置詞・1 人称代名詞（3 回と 3 回）

集中化構造の枠組である前半（20 節）では前置詞「～を/に」(ל) に

19　フランシスコ会聖書研究所の訳文は 21 節だけを前後から切り離して行をあけ強調しているが, 文学構造の観点からは適切ではないと考えられる。『士師記・ルツ記』（中央出版社 1993）162 頁参照。

20　21 節前半の F. Bush の構造分析は正しいが, 彼がこれを B として B'（21d ＝本稿の 21bβ）に対応させているのは正しくなく，W（20b ＝本稿の 20aβと 20bα）と W'（21c ＝本稿の 21bα）を wordplay で対応させるのも無理があると思われる。前掲書，89-90 参照。上述のようにナオミの会話全体は集中化構造である理解される。

1人称代名詞がついた「私を」（לִי/lî）が3回あり，後半（21節後半）では「私を」（לִי）が2回と，前置詞「～に/を」（b）に1人称代名詞がついた「私を」（בִּי/bî）が1回の合計3回あらわれ，少しく均衡をくずしながらもシンメトリーな対応関係にあると見てとれる。

前半	(a-1)	20aβ	私を（לי）	後半	(a'-1)	21bα	私を（לי）
	(a-2)	20bα	私を（לי）		(a'-2)	21bβ	私を（בי）
	(a-3)	20bβ	私を（לי）		(a'-3)	21bγ	私を（לי）

ルツ記1章全体の中で「私を」（לי）と「私を」（בי）がどのように配置されているかを見てみると，そのどちらもがナオミの嫁たちに対する言葉（11-13）と，ルツのナオミに対する言葉（16-17節）の中で使われているということがわかる。

㈠ 11-13節（ナオミの嫁たちに対する言葉）との比較

すでに見たように，ナオミの嫁たちに対する会話の部分（11-13）は「私の娘たちよ」という呼びかけの言葉で3区分（A-1，A-2，A-3）されており，לי はそれぞれの中で均等に配置されている。

11b 私には，私のお腹（なか）にはまだ子供達がいると～，　העוד־לי בנים במעי
12b 私にはまだ望みがあると考えて，　כי אמרתי יש־לי תקוה
13b 私にはあなた方のことが大変に苦しいのです。　כי־מר־לי מאד מכם

最後の13bは当該個所の20bと対応する。13bでナオミは嫁たちにあなたがたが私を大変に苦しめると言うが，20bでナオミは女たちに対して全能者が私を大変に苦しめると言う。ナオミにとって相手が嫁たちと全能者という違いはあるが，どちらもナオミを「大変に」（מאד）苦しめるというのである。どちらの箇所においても文節は「実際」（כי）で始まり，それに「苦しい」（מר）/「苦しめる」（מרר）が続いている。

13b 私にはあなた方のことが大変に苦しいのです。　כי־מר־לי מאד מכם
20b 全能者は私を大変に苦しめられたのです。　כי־המר שדי לי מאד

さらに，13bでは「私に大変に」（לי מאד）＋「あなたがたから」という構文，20bでは「全能者」＋「私を大変に」（לי מאד）という構文になっていて，13bと20bの両者を合わせてみるとキアスムスの構成となっているということがわかる。

┌ 13b ナオミ→嫁たち：kî ＋苦しい＋(a)私に＋大変に＋(b)あなた方から
└ 20b ナオミ→女たち：kî ＋苦しめる＋(b')全能者は＋(a')私を＋大変に

他方「私を」(בי) はナオミの嫁たちに対する会話の最後 (13bβ) にあって，主の手が私に出ているとして，21 節と同様に主がナオミを苦しめることを意味している。これもまた両者を合わせみるとキアスムスの構成となっていることがわかる。

┌ 13b (b) 主の手が (a) 私に(בי)出ている。 יד־יהוה (b) יצאה בי (a)
└ 21b (b') 主は (a') 私を(בי)痛めつけ， ענה בי (a') ויהוה (b')

㈡ 16–17 節（ルツのナオミに対する言葉）との比較

ルツのナオミに対する言葉（16–17 節）の中でも「私に」(לי) と「私に」(בי) が 1 回ずつ用いられている。

┌ 16aα そんなひどいことを私に(בי)強いないで下さい。 אל־תפגעי־בי
└ 17bα 主がいくらでも私に(לי)そうされますように。 כה יעשה יהוה לי

「私に」(בי) はルツの会話（16–17 節）の始め（16a）にあって相手はナオミという人であるのに対し，「私に」(לי) は会話の終わりの部分 (17b) にあって相手は主という神である。

他方，ナオミの会話（20–21 節）の中では לי が 4 回先にあって相手は町の女たちという人であるのに対し[21]，後に 1 回ずつある בי ＋ לי の相手は主，全能者という神である[22]。

┌ 21bβ 主は私を（בי）痛めつけ， ויהוה ענה בי
└ 21bγ 全能者は私に（לי）悪い仕打ちをされたのです。 ושדי הרע לי

㈢ナオミの会話（11–13 節）とルツの会話（16–17 節）との比較

ナオミの会話（11–13 節）の中での לי ＋ בי の順序と，ルツの会話（16–17 節）の中での בי ＋ לי の順序は入れ替わっていることになり，両者を合わせてみればキアスムスの様式で構成されているということが明らかとなる。但し，どちらも先に人の側からの苦しみを述べ，後に神の側からの痛みを記すというふうに並行的となっている。

---

[21] 前半の 3 回と，後半のはじめの 1 回を合わせてのことである。
[22] 両分節は同義的並行法で記されている。

ナオミの言葉（13 節）とルツの言葉（16-17 節）

13bα　(A) 人→לי (a)：私には(לי)あなたがたのことが大変に苦しい。
13bβ　(B) 主→בי (b)：主の手が私に(בי)出ていることなのですから。
16aα　(A') 人→בי (b')：そんなひどいことを私に(בי)強いないでください。
17bα　(B') 主→לי (a')：主がいくらでも私に(לי)そうされますように。

（ii）動詞「呼ぶ」(קרא)

㊀ナオミ-マラ-ナオミ

動詞「呼ぶ」は前半の a（20 節）で 2 回，後半の a'（21 節）で 1 回使われている。これらの用法をナオミの会話全体の中で見れば，20b の「私をマラと呼んでください」をはさんで「私をナオミと呼ばないでください」(20a) と「私をなぜナオミと呼ぶのですか」(21b) が枠組を形成し，ナオミ-マラ-ナオミという構造になっているということがわかる。

a-1　ナオミと私を呼ばないでください。　אל־תקראנה לי נעמי
a-2　マラと私を呼んでください。　קראן לי מרא
a'-1　なぜナオミと私を呼ぶのですか。　למה תקראנה לי נעמי

枠組を構成する a-1 と a'-1 は，ただ最初の一語が違うだけであり，前者が否定詞（אל/'al），後者が疑問詞（למה/lamâ）で始まる文節である。ただ後者の疑問詞は反語的な用法であり，両者は同じ意味合いを持つ文節として対応関係にあると言える。

㊁否定詞（אל）と疑問詞（למה）

この否定詞（אל）と疑問詞（למה）は，順序は逆ではあるが，ナオミが嫁たちに語りかける会話の中（11，12 節）においても一対となって用いられている。1 章の中心（B）にある 8 ～ 17 節にはナオミの会話が 3 回あるが，その真中にある第 2 回目の会話（11-13 節）の枠組それぞれの最初に疑問詞（למה）と否定詞（la）が措定されている[23]。

11a　(a) 私の娘たちよ，　(b) なぜ，　למה (b) בנתי (a)
13b　(b') いけません。　(a') 私の娘たちよ，　בנתי (a') אל (b')

11-13 節のナオミの嫁たちに対する会話と，20-21 節のナオミの女たちに対する会話における否定詞（אל）と疑問詞（למה）の両者を合わせ

[23] 拙稿「ルツ記の研究 ── 1 章 8 ～ 17 節 ──」34-35 頁参照。

てみると，全体としてキアスムスの様式で構成されているということが明らかとなる。前者はナオミが嫁たちに，後者はナオミが町の女たちに語りかける言葉においてであり，両者ともにナオミが複数の女性を相手にしての会話においてのことである。

ナオミ→嫁たち

(a) 11a　なぜ，私と一緒に来ようとするのですか。　למה תלכנה עמי

(b) 13b　いけません，私の娘たちよ。　אל בנתי

ナオミ→女たち

(b') 20aβ　いけません，私をナオミと呼ぶのは。　אל־תקראנה לי נעמי

(a') 21bα　なぜ，私をナオミと呼ぶのですか。　למה תקראנה לי נעמי

㊂対立：ナオミとマラ

20aβ　私をナオミと呼ばないでください

20bα　私をマラと呼んでください

20aβと20α bで動詞「呼ぶ」は並行的に書かれている。しかしながら前者がナオミと呼ぶことの否定，後者がマラと呼ぶことの肯定であって，呼ぶことの否定と肯定，ナオミとマラの対立がある。

㊃4章の「呼ぶ」(קרא) との比較

1章20-21節の「呼ぶ」と4章11-17節の「呼ぶ/名付ける」はルツ記全体の始めと終わりにあって対応関係にある[24]。

1：20a	ナオミ→女たち	私をナオミと呼ばないでください。	תקראנה
1：20b	ナオミ→女たち	私をマラと呼んでください。	קראן
1：21b	ナオミ→女たち	私をなぜナオミと呼ぶのですか。	תקראנה
4：11	民，長老→ボアズ	ベト・レヘムで名を呼ぶ。	וקרא־שם
4：14	女たち→ナオミ	彼の名はイスラエルで呼ばれる。	ויקרא שמו
4：17a	女たち[25]	彼の名を名付ける。	ותקראנה ～ שם
4：17b	女たち	彼の名をオベドと名付ける。	ותקראנה שמו

[24] S. Bertman, "Synmetrical Design in the Book of Ruth" *JBL* 84 (1965) 165-168. 但し，彼は (1) 1：8-18と (1) 4：1-12, (2) 1：19-21と (2) 4：14-17を対とする。

[25] 原文では「住民（近所）」の女性複数形。

1：20–21 ではナオミと呼ばないでください，マラと呼んでください，なぜナオミと呼ぶのですかと立て続けに動詞「呼ぶ」はナオミという名前に対して否定的な用法で使われている。

それに対して 4：11–17 で動詞「呼ぶ」はすべて肯定的な意味で使われている。4：11 では門にいたすべての民と町の長老たち（男性）が，ボアズ（男性）に対してエフラタで富を成し，ベト・レヘムで名を成せ（呼べ）と言う。地名のエフラタとベト・レヘムが並行的であり，動詞の命令形の「成す」と「呼ぶ」が並行的である。エフラタとベト・レヘムは 1：2 との対応関係が認められ，そこでは二人の息子，マフロンとキルヨンが問題となっているのに対し，4 章では息子の誕生が暗示されている。

4:14 では今度は女たちがナオミに向かって，イスラエルでルツによって産まれた息子の名が呼ばれるように（名声を博するように，ニファル形）と言う。1：19 で女たちはナオミに向かって「これはナオミではないの」とナオミ（女）の名前を口にして言う（ותאמרנה）が，4：14 では女たちはナオミに向かって「彼の名[26]がイスラエルで呼ばれるように（その子がイスラエルで名を成すように）」と彼（男）の名前を口にして言う（ותאמרנה）。4:17 では住民の女たちがナオミに子供が生まれたと言って彼に名をつけ（ותקראנה），その子をオベドと名付けた（ותקראנה）と書かれている。これは 1：12 でナオミが否定的に男の子を生む可能性について語っているのに対応する[27]。

1：20–21 ではナオミが女たちに語りかける会話の中で「呼ぶ」は使われており，4：11 では門にいるすべて民と町の長老たちがボアズに述べる会話の中で「呼ぶ」が用いられている。そして 4:14 では女たちが，4：17 では住民の女性たちがナオミに対して言う言葉の中で「呼ぶ」が使用されている。

すなわちルツ記全体に合計 7 回ある動詞「呼ぶ」は，4：11 の男性が男性に語りかける言葉を真中にして，その前後 3 回それぞれは女性が女

---

[26] 但し，LXX では「あなたの名が」となっている。

[27] 名詞「男の子」（ילד）は 1：5 では死んだ男の子，4：16 では生まれた男の子と対照的である。

性に語りかける言葉の中にあらわれるということである。前の3回はナオミが女たちに言う言葉の中で女性の名前（ナオミ）が否定的に，後の3回は女たちがナオミに言う言葉の中で男性の名前（オベド）が肯定的にである。

（ⅲ）人名と神名

ナオミ（人名）と全能者（神名）が会話の前半と後半のそれぞれのはじめとおわりにあって枠組を形成している。前半は人名(ナオミとマラ)が2回，神名（全能者）が1回，後半は人名（ナオミ）が1回，神名（主と全能者）が2回であり，人名に関しては動詞「呼ぶ」が3回使われ，神名に関しては同義的動詞,「苦しめる」,「痛めつける」,「悪い仕打ちをする」が3回用いられている。これは前半＝2回＋1回，後半＝1回＋2回という構成で，創世記1章の6日間の構成における無生物と生物の創造の記事に対応すると見てよいだろう[28]。

＊ナオミの言葉の分割（ルツ記）

（a-1）20aβ ナオミ(呼ぶ)　（a'-1）21bα ナオミ(呼ぶ)

（a-2）20bα マラ　(呼ぶ)　（a'-2）21bβ 主(痛めつける)

（a-3）20bβ 全能者(苦しめる)（a'-3）21bγ 全能者(悪い仕打ちをする)

＊神の言葉の分割（創世記)[29]

第1日目	無生物（分ける）	第4日目	無生物（分ける）
第2日目	無生物（分ける）	第5日目	生物（それぞれ）
第3日目	生物（それぞれ）	第6日目	生物（それぞれ）

㈠人名：ナオミとマラ

§1　並行：ナオミとナオミ

すでに見たように，a-1とa'-1の文節は否定詞と疑問詞が異なるだけでナオミの名前が並行して出て来る。

---

[28] 6日間の構成に関しては，他にも神の言葉の対応（5回と5回）と語数の対応によって，1，2，3，4日と5，6日の4日（207語）と2日（206語）に分ける見方（P. Beauchamp）や，記事内容の対応から1，2，3，日と4，5，6日の3日と3日に分ける見方などがある。

[29] 「分ける」は全部で5回,「それぞれ」は全部で10回である。

§2　対立：ナオミとマラ

a-1のナオミとa-2のマラは意味的に「甘美な」と「苦い」と対立する人名として述べられている[30]。ナオミの意味の説明はここではないが，マラの意味の説明は次の分節a-3にあり「苦い」と理解される。ナオミと呼ばないでください，マラと呼んでくださいと否定文と肯定文としても対立している[31]。

§3　交差：ナオミ-マラ×マラル-ナオミ

人名を続けて見れば，ナオミ，マラ，ナオミとなるが，a-3の説明の動詞「苦しめる」（מרר）を含めれば[32]，ナオミ-マラ×マラル(動詞)-ナオミとなり，キアスムスの様式で構成されているということになる。4分節のこれらの単語の前にはすべて「私を」（לי）の一語があり，a'-2とa'-3の2分節がלי あるいはבי の後に何の単語も記されていないことからも，この4分節は一種の様式美をもって書かれていると考えられる。

(a-1)	a	ナオミ	否定	אל־תקראנה לי נעמי
(a-2)	b	マラ	肯定	קראן לי מרא
(a-3)	b'	マラル	理由	כי־המר שדי לי מאד
(a'-1)	a'	ナオミ	反語	למה תקראנה לי נעמי
(a'-2)				ויהוה ענה בי
(a'-3)				ושדי הרע לי

(二)神名：主と全能者

同一人物の人名に関してナオミとマラの二語が使われていたように，同一神格についても主と全能者の二語が用いられている[33]。但し，ナオ

---

[30] E. F. Campbellは"Sweet one", "Bitter one"と訳す。*Ruth*, 76頁参照。但し，マラは架空の人名ではある。

[31] I. Fischerは19bのナオミと20bのマラの名前は肯定的な，20aと21bのナオミの名前は否定的な言述として見る。その理由づけは20bの全能者と21bの主，全能者の分節にあるとするが，文学構造の観点から適切であるとは思われない。*Rut* (Herder 2001) 150.

[32] 明白には記されていないが，創4:2のカインの名前の説明が「得る」（カナー）であると考えられるのに相当する。

[33] 神の単語はここでは出てこない。

ミとマラの場合には対立的，主と全能者の場合には並行的である。

また人名が前半のはじめ（a-1，a-2）の2分節の最後にあったのとは反対に，神名は後半のおわり（a'-2，a'-3）の2分節の最初に措定されている。

（a-1）……ナオミ
（a-2）……マラ　　（a'-2）主　　……
　　（a'-3）全能者……

§1　並行：全能者と全能者

a-3とa'-3の全能者はすでに見たように並行的に書かれている。ただ両分節を合わせてみると，動詞-主語×主語-動詞という順序でキアスムスの様式となっているということがわかる。また動詞は異なるが同義的な動詞であり[34]，どちらも同じ使役形である[35]。

a-3　苦しめる（מרר，hif.）　　＋全能者（שדי）＋私を（לי）
a'-3　全能者（שדי）＋悪い仕打ちをする（רעע，hif.）＋私に（לי）

§2　交差：全能者と主

人名のナオミとマラが前半と後半の枠組でキアスムスの様式によって構成されていると見たが，神名の場合には集中化構造の真中のb（21a）を合わせて入れて見ると，全能者-主×主-全能者というキアスムスの様式で形成されているということがわかる[36]。前半のaとbは動詞-主語の順序であるが，後半のb'とa'は主語－動詞という順序になっている。

（a）20bβ　動詞＋全能者　（b）21bβ　　主＋動詞
（b'）21aβ　動詞＋主　　（a'）21bγ　全能者＋動詞

動詞はすべてナオミに対して否定的なものである。21aの場合には主がナオミを「何も無しで帰す（שוב）」と言われているが，その他の三か

---

[34]　a'-3の「悪い仕打ちをする」（רעע，hif.）を「苦しめる」と訳すことも可能である（創43：6，ミカ4：6等参照）。רעע の使役形が主を主語として前置詞「～に/を」（ב）をともなうのは，出5：22，民11：11，ヨシ24：20，エレ25：6，ザカ8：14. 前置詞なしには王上17：20，ミカ4：6，ゼファ1：12，詩44：3. *DCH*, VII：530参照。

[35]　מרר と רעע は両者ともに二重アイン（עע）の動詞である。

[36]　R. L. Hubbard, 前掲書, 126頁, 注30参照。

所はすべて「苦しめる」（מרר）[37]，「痛めつける」（ענה）[38]，「悪い仕打ちをする」（רעע）という同義的動詞が使われている。

②真中　b

ナオミの会話の真中（21節前半）には私と主の対立がある。21節前半は「私」（אני）の単語で始まり，「主」（יהיה）の単語で終る。この二語が対立的に枠組を形成している。飢饉という食物のない辛い状況でありながらも，「私」は家族がそろった満ち足りた境遇で出かけたのに，今度は食物があるという幸いな状況でありながら，「主」は家族が欠けた空しい状態で私を帰らせたというのである。全体は少しく変形はしているがキアスムスの様式で形成されている。

（a）私は＋（b）満ち足りて＋行く

（b'）何も無しで＋帰す（a'）主は

（ｉ）対立：私と主

㈠私

すでに考察したように，21節にある「私」（אני ＝ 1人称代名詞）は，枠組である前半（20節）と後半（21節）に3回ずつ出てくる「私を」（בי/לי ＝前置詞＋1人称代名詞語尾）の真中にあって前半と後半を媒介するものである。前半は私に重点があり ── ナオミが2回 ──，後半は主に重点がある ── 主と全能者で2回 ──。それゆえ，21節前半の最初に「私」（אני）があって前半を受け継ぎ，最後に「主」があって後半へと繋いでゆくのである。

37　ヨブ27：2には「全能者が私（נפשי）を苦しめられた（מרר）」とある。

38　本稿ではLXX, Vulg., Syr.などに従って ענה II のピエル形「痛めつける，悩ます」と解釈する。ただ ענה II は前置詞「～に」（ב/b^{e}）を取らないので問題は残る。P. Joüon, *Ruth*, 45. *BHQ*（Stuttgart 2004）52* 参照。申26：6では רעע の使役形と ענה II のピエル形が並行的に使われている。「エジプト人は私たちを苦しめ，虐げ，～」。MTは ענה I「答える」の qal，3人称単数形。F. Bush, 前掲書, 93. R. L. Hubbard, 前掲書, 126-127, フランシスコ会聖書研究所, 前掲書, 162-163頁参照。*BDB*, 773（但し，ענה *humiliate*）, *DHC*, VI:496（但し，unless ענה II afflict）", *HALAT*, II:806（但し，Gerleman ～ nach G S V ab）。

(二)主

「主」は1章で合計7回使われている[39]。まず6節の叙述文においては「主がその民を顧みられた」と主の好意が述べられている。これは食物に関係することであるが，それが機縁となってナオミたちはベト・レヘムに帰る決意を固めるのである。次にナオミは最初の会話において「主があなたがたに恵みを施し，～主があなたがたに与えられるように～」(8節)と二人の嫁たちに言うが，次の会話においては子供ができないことの不満を「主の手が私に出たのです」(13節）と述べる。ルツはナオミに対してあくまでも彼女についてゆくことを述べ，もしそうでないならば「主がいくらでも私を罰せられますように」(17節）と言う。最後の会話においてナオミは町の女たちにあからさまに「主は私を何もなしで帰らせられた」(21節前半）と言い，「主は私に悪い仕打ちをされた」(21節後半）と述べる。

1章において主は善意の主で始まりつつも，徐々に主はナオミには耐え難い存在として立ちはだかり，彼女は主に対する不満を吐露するのである。

(ii）対立：「満ち足りて」と「何も無しで」

「満ち足りて」(מלאה）私（ナオミ）が出かけたと述べる前分節と，「何も無しで」(ריקם）主が私（ナオミ）を帰らせたという後文節は対立する。問題はこの「満ち足りて」と「何も無しで」の意味である。

上述の(二)「主」の項で考察したように，ナオミが主に対して不満を持つのは自分に子供がいないことによる。食物に関しては保障されたのでベト・レヘムに帰って行く。しかし子供はいない。息子二人はなくなり，自分にはもう子供の出来る可能性はない。

飢饉のゆえにナオミは夫と二人の息子とモアブの平野に出かけて行ったが[40]，主がその民を顧みられ食物を与えられたと聞いて，ナオミはベト・レヘムに帰って来る。ただ一緒に帰って来たのは嫁のルツだけであ

---

39 1：6，8，8，13，17，21a，21b.

40 “un mari et des fils” P. Joüon, 前掲書, 44-45頁。“Her life lacked nothing” R. L. Hubbard, 前掲書, 125頁。

る。モアブの平野で夫と息子の二人の男性3人を失ったからであり[41]，嫁のオルパも別れたからである。それゆえナオミは主は私をむなしく何も無しで帰らせられたと言うのである[42]。

「満ち足りて」と「何も無しで」は土地や財産のあるなしではなく，また食物や衣服のあるなしでもなく，家族 ── 特に息子 ── のことであると解される。これがナオミの町の女たちに対する発言の中心である[43]。

（iii）対立：「行く」と「帰る」

前分節（21aα）には「行く」（הלך）が[44]，後分節（21aβ）には「帰る」（שוב，使役形）があって「行く」と「帰る」が対立する動詞として出てくる。

18-22節全体では，a（18-19節）で「行く」が2回，a'（22節）で「帰る」が2回使われている。真中のb（20-21節）ではa（18-19節）の「行く」を受け継ぐかたちで「行く」があり，a'（22節）の「帰る」に引き渡すかたちで「帰る」が置かれている[45]。

行く（18節）＋行く（19節）＋行く（21節）

帰る（21節）＋帰る（22節）＋帰る（22節）

---

41 "neither husband nor children" R. L. Hubbard, 前掲書, 126頁。

42 「何も無しで」（ריקם）と「帰る」（שוב）が一緒に出て来るのはサム下1：22，イザ55：11，エレ14：3，50：9である。「帰る」（שוב）の使役形はルツ記では他に4：15にあり，そこでは魂（ネフェシュ）を生き返らせるという意味で使われており，22節で言われている何も無しで帰らせるを覆している。

43 但し，3：17でルツがナオミに言う「何も無しで」は大麦のことである。

44 R. L. Hubbardは "I left" と訳し，1：1との関係を見る。前掲書，122頁。1節の「行く」はエリメレクが飢饉のために出かけたことを言い，21節の「行く」はナオミが「満ち足りて」て出かけたことを述べ，背後に否定的な意味（飢饉）と肯定的な意味（家族）を持っており，同じ動詞が使われながらも対照的な用法である。

45 これは先に見た「私」（אני）がBの前半の「私を」（לי）と後半の「私を」（לי，בי）の真中にあるのに構造的に同じである。

3. ナオミとルツの帰還

(1) 1：22 の本文

22aα (6 語) ותשב נעמי ורות המואביה כלתה עמה
22aβ (3 語) השבה משדי מואב
22bα (4 語) והמה באו בית לחם
22bβ (3 語) בתחלת קציר שערים

(2) 1：22 の翻訳

22aα ナオミは…［挿入句］…モアブの女性ルツと一緒に帰った。
22aβ …モアブの平野から［自分たちのところへ］戻って来た…
22bα 彼女たちはベト・レヘムに着いた。
22bβ それは大麦の刈り入れのはじめの頃であった

(3) 1：22 の構造

人物：帰る(3sg.f.)＋ナオミ＋ルツ ＋モアブの女性＋嫁～
場所：帰る(3sg.f.)・冠詞 ＋モアブの平野・から
場所：彼ら(3pl.m.pron.)[46]＋着く(3pl.m.)＋ベト・レヘム
時間：［名詞文］ 初めに＋刈り入れ＋大麦

ルツ記 1 章の最後である 22 節は一節でありながら，物語のまとめとして 1 章のすべてを総括している。これは 1 章の最初である 1-2 節が人物，場所，事件の 4W を含んでいるのと対応関係にあり，1 章全体の枠組を構成している[47]。以下においてルツ記のはじめとおわりの対応関係を，時間，事件，場所，人物に関して考察する。

---

[46] 8 節の代名詞の場合と同様，女性形ではなく男性形代名詞が使われている。

[47] 1 章のはじめ（1 節）とおわり（22 節）は文体的に対応している。1 節では動詞「ある」（היה）が 2 回繰り返され，22 節では動詞「帰る」が 2 回繰り返されている。

	A（1節）	A'（22節）
人物	男性＋ナオミ	ナオミ＋女性
場所	ベト・レヘム→モアブの平野	モアブの平野→ベト・レヘム
時間	士師たちが治めていた時代	大麦の収穫の初めの頃
事件	飢饉	収穫

①時間

A　1節　：士師たちが治めていた時代に，　ויהי בימי שפט השפטים
A'　22節：大麦の刈り入れのはじめに，　בתחלת קציר שערים

1節の最初の分節（1aα）と，22節の最後の分節（22bβ）はどちらも時間を表示するという意味で対応している[48]。両者において前置詞「～において」（ב）が時間のために用いられており，前者では「～時代に/～日々に」（בימי），後者では「はじめに」（בתחלת）と記されている。

1節では士師たちが治めていた時代という設定があるのに対し，22節では大麦の刈り入れの初めの頃という季節の設定がある[49]。1節の単語自体は「日々に」（יום の複数）という基本的には日を意味する単語が使われているが，ここでは数年という長い単位の時間が考えられる[50]。

それに対して，22節は大麦が収穫される一年の中のある季節という短い単位の時間である[51]。ただ1章の終りにおいて「はじめに」と述べられているのは，これから展開される物語のはじめを意味するからでもあると考えられる[52]。

ルツ記1章は，士師たちが世を治めていた時代という長い時間の設定ではじまり，大麦の刈り入れのはじめというより短い時間の設定でおわる。

他方，ルツ記全体は，士師たちが世を治めていた時代という長い時間

48　主語はどちらも複数形である。

49　これは出来事の時期を正確に述べるためであると P. Joüon は言う。

50　士師記によれば，士師が裁いた年数の最小期間はエフタの6年（士12:7）であり，最長期間はエフドの80年（士師3：30）である。

51　通常は4，5月頃である。ルツ2：23，サム下21：9-10，ユディト8：2，参照。

52　2章から3章にかけては大麦の収穫の場面が設定されている。2：17，23.3：2，15，17.

のスパンで開かれ，10年の歳月を経て（1：4），ペレツからダビデへまでの10代の世代（4：18-22）という長い時間のスパンで閉じられる。

②出来事

B'　1aβ　：飢饉の発生　　ויהי רעב בארץ
B'　22bβ：大麦の収穫　בתחלת קציר שערים

最初の1節が「その地に飢饉があった」との危機的な出来事の記述ではじまるのに対し，最後の22節は「大麦の収穫の初めに」との朗報的な出来事でおわる。大地の「飢饉」に対して大麦の収穫という「食物」が対立する。

1節は飢饉がその地であったと飢饉の場所を特定しているのに対し，22節は大麦の刈り入れの初めの頃と収穫の時間を設定している。1節の「その地」はその次の分節でベト・レヘムであるということが明らかになるのであるが，22節では大麦の刈り入れの場所はその前の分節で言われているベト・レヘムに他ならない。1節では飢饉がおこったのが皮肉なことにベト・レヘム（家・食物）であるというのに対し，22節ではベト・レヘムに着いたのが大麦の収穫の頃とレヘム（食物）を具体的に「大麦」と書き表している。1章全体で見れば，ベト・レヘムではじまる物語は6節の「食物」（レヘム）で大きな転換点をむかえ，ベト・レヘムへでおわるのである。

③場所

1節では，ある男がモアブの平野に一時滞在するためにベト・レヘムから出かけて行くのであるが，22節ではモアブの平野から自分たちのところに戻って来たモアブの女性ルツと一緒にナオミがベト・レヘムに帰着する。1節と22節を照らし合わせれば，ベト・レヘム-モアブの平野×モアブの平野-ベト・レヘムとキアスムスの様式で形成されていることになる。

(a) 1bα　：ベト・レヘムから　　וילך איש מבית לחם
(b) 1bα　：モアブの平野へ　　לגור בשדי מואב
(b') 22aβ　：モアブの平野から　　השבה משדי מואב
(a') 22bα　：ベト・レヘムへ　　והמה באו בית לחם

22節でルツがモアブ人の女性（המואביה）で，彼女はモアブの平野（שדי מואב）から自分たちのところに戻って来た者（שוב）のだと説明されている[53]。ベト・レヘムに帰って来るのはナオミとルツの二人の女性であるが[54]，ここではモアブを2回繰り返すことによって，ルツとモアブの関係が特に強調されている[55]。

2節ではナオミの二人の息子マフローンとキルヨーンがユダのベト・レヘムからのエフラタ人（אפרתים）と言われるのに対し，4節では彼らに二人のモアブ人の女性（מאביות）を娶ったと述べられ，エフラタ人男性（複数）とモアブ人女性（複数）が対比されている。そして最後の22節ではナオミとルツの二人の女性のうち，ルツがモアブ人女性（単数）であるいうことが強調されて終わっている[56]。

2節	：マフローンとキルヨーン（二人の男性）	מחליון וכליון
	ベト・レヘムからのエフラタ人男性(複数)	אפרתים מבית לחם
22節	：ナオミとルツ（二人の女性）	נעמי ורות
	モアブの平野からのモアブ人女性(単数)	המואביה ～ משדי מואב

---

[53] השבה はMTのアクセントから関係代名詞の役割を果たす冠詞をともなった完了と理解される。2：6，4：3参照。השבה の主語がナオミなのかルツなのかという問題があるが，最近の多くの註解書が述べるように，本稿でもルツが妥当であると解釈する。E. F. Campbell, *Ruth*, 80. E. Zenger, *Das Buch Ruth*, 44. R. L. Hubbard, 前掲書 128–129. E. Bush, 前掲書, 94. I. Fischer, 前掲書, 150,154.

[54] はじめの「彼女は帰った」ותשב は3人称女性単数で主語はナオミであるが，これにはルツも含まれる。6節の「彼女は帰った」ותשב と同じであり，インクルジオとなっている。1章で12回（1：6，7，8，10，11，12，15，15，16，21（hif），22，22.）使われている「帰る」（שוב）の最初は（6節）ナオミ，最後（22節）はルツが主語となっており，どちらもモアブの平野からの帰還と述べられている。E. F. Campbell, 前掲書, 80頁参照。

[55] 「帰る」も2回繰り返されているが，はじめはナオミ，あとがルツと主語は異なる。

[56] モアブ人女性には冠詞がついていて，ルツが「そのモアブ人女性」と特定されている。2:2，6，21.4:5，10参照。F. Bush はこれをルツのフルネームで，外国人起源の強調であると述べる。前掲書，94頁参照。

④人物

1節は「ある男」という不特定の人物ではじまり，つづいても「彼」,「彼の妻」,「彼の二人の息子たち」とだけ書かれており，具体的な名前は述べられていない。具体的な名前は2節に入ってからで,「名前」（שם）という単語を3回並列して,「その男の名はエリメレク」,「彼の妻の名はナオミ」,「彼の二人の息子の名はマフローンとキルヨーン」と述べられている。

ここではまだモアブの女性オルパとルツは登場しない。彼女らの名が出てくるのはエリメレクの死後，二人の息子に嫁を取ることになる4節においてである。彼女らはモアブ人女性（複数）で「名前」（שם）という単語を2回並列して述べられている[57]。

ベトレヘムに帰着するのはナオミとルツ，姑と嫁の女性二人だけである。夫が亡くなり，二人の息子も亡くなり，男性3人はすべて消えている。他方女性3人は残っている。ただ，二人の息子の嫁であるモアブ人女性のオルパは自分の民，自分の神のところに帰り（שוב），モアブの平野からナオミのところへ戻った（שוב）ルツのみがナオミとともにベトレヘムに帰るのである。15節でナオミはルツに義理の姉妹（オルパ）のあとを追って帰りなさい（שוב）と言うのであるが，22節でルツはナオミのところに戻って（שוב）一緒にベトレヘムに帰る。

おわりに

本稿ではルツ記1章の最後の部分である(A')18-22節が,(a)18-19節,(b）20-21節,（a'）22節の三区分から成り立ち,（b）のナオミの会話を真中にして，前後に対応する叙述文が置かれた集中化構造であると分析した。

ルツ記1章は,（A）1-7節,（B）8-17節,（A'）18-22節の三部構成で，真中の（B）にはナオミと嫁たちとの会話があり，これをはさんで（A）と（A'）が対応している。

---

[57] マフローンとキルヨーンの場合には「名前」（שם）は兄弟二人に対し1回だけである。

（A）はエリメレク一家のベト・レヘムからモアブの平野への出発と，ナオミと嫁たちのベト・レヘムへの帰還の途中で話は途切れ，（B）はその道中でのナオミと嫁たちとの会話である。（A'）は再度，帰途の続行から話がはじまり，やがてナオミとルツがベト・レヘムへと到着する記事で終わる。

（A）と（A'）を繋げるのは，インクルジオとなっている動詞「行く」（7節と18-19節）であり，地名「モアブの平野」（6節）と「ベト・レヘムへ」（19節）である。

（A）1-7節は，（a）1-2節，（b）3-5節，（c）6-7節の三区分から成り立つのであるが，6-7節に相応するのが18-19節であることから，18-19節はキアスムスの観点から（A'）の（c'）として理解される。

（A）の真中にある（b）3-5節と（A'）の真中にある（b）20-21節は，両者ともに集中化構造となっていることから対応関係が認められると考えられる。（A）の（b）の真中には「一人の名はオルパ，もう一人の名はルツ」（4節）とあり，（A'）の（b）の真中には「私と主」（21節）があり，どちらも結合と分離の意味を持っている[58]。それゆえ20-21節は，3-5節との相応から，（A'）の（b'）として把握される。

（A）のはじめの（a）1節と，（A'）のおわりの（a）22節の対応関係は本稿で見たとおりであり，22節は1-7節との相応から，（A'）の（a'）と理解される。

すなわち，ルツ記1章は（B）8-17節を真中にして，（A）1-7節と（A'）18-22節がこれを囲い込み，（A）の（a）1-2節，（b）3-5節，（c）6-7節は，（A'）18-22節の，（c'）18-19節，（b'）20-21節，（a'）22節に対応すると見てよいであろう。

---

[58] オルパとルツはモアブ女性で義理の姉妹であるが，オルパは去って行く。私（ナオミ）と主は信頼関係がありつつも，ナオミは神の仕打ちを嘆く。